カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

【Ｎコード】
Ｎ３１００Ｓ

【作者名】
メア

【あらすじ】
この話しはカンピオーネの二次創作です。
ご都合主義が多分に入ります。
なぜなら、神は普通倒せないから！
そして、これは八人目の神殺し……幼女魔王の話しである。

ドイツ郊外。

少女は目の前の光景が信じられなかった。

生まれてから6年間育った街は瓦礫の山となっていた。

見渡すとたくさんの死体が目に入った。

自分を守り死んだ両親が目の前にいた。

「いやあああああ！！！！！！！！！！」

絶叫をあげ現実を否定しようとするがかなわず、しだいに落ち着きを取り戻した。

そして、目の前で戦い合っているまつろわぬ神二柱に復讐を決意するのだった。

再開＋ナイトウィザードを追加します。

プロローグ（前書き）

ネギまがメインなので更新はゆっくりです。

プロローグ

少女は目の前の光景が信じられなかった。

生まれてから１０年間育った街は瓦礫の山となっていた。

見渡すとたくさんの死体が目に入った。

そして、自分の横に横たわっていたのは両親の死体だった。

「いやあああああ！！！」

そして、少女は元凶に復讐をちかった。

そう、目の前で殺し合いをしているまつろわぬ神の二人に。

少女は立ち上がり周りを見渡した。

「あれを使えばいいんだ。」

少女が手にしたのは神が使っていた神の槍だった。

槍は少女の生まれもった強大な呪力を吸い上げ重量が格段に下がり威力が上がってゆく。

そして、少女はお互い必殺の一撃を近距離で撃ち合い拮抗しているまつろわぬ神の背後から自信の生命力も吸わせ二人の神を撃ち貫いた。

「「なんてことをしてくれた！」」

「死ね。皆の敵だ。」

そして、極限まで拮抗していた力は外部からの刺激により暴発した。

お互い傷つき満身創痍だった二柱の神に成す統べもなく、少女とともに消滅した。

ドイツにある一つの街が地図から消えた。

後に残ったのは大きなクレーターだった。

幼女魔王リーゼロッテ・モルディオの誕生

「おのれ小娘め我とフレイヤの戦いを邪魔をするとは！」

「我等が動けぬうちに背後からの見事な一撃でした。あのタイミングで神槍でなければやられませんでしたが。」

朦朧とした意識の中で聞き取れる会話があった。

激痛が五体を苛み、頭と全身がとてもなく痛い。

「ふん、貴様がグングニルなど借りて来るからだ。」

「貴方に勝つためです仕方ないでしょう。」

あれだけダメージ受けたのにまだ死んでないなんて変。

「小娘も蘇るんだ、その時かりを返してやる。」

「エピメティウスとパンドラめの忌まわしき姉妹が残した呪法ですね。愚者と魔女の落し子を生む暗黒の聖誕祭、神を贄として初めて成功するさんだつ（でなかった）の秘技ですね。我等の神力が彼女の心身に流れこんでいます。」

「我の時の神としての力もか。」

「ええ、こんなケース初めてだけど二人同時に倒してるからね。」

「もう、新たな落し子の誕生に気付いたか。」

「パンドラが直々に来ましたか。」

「あら、ご挨拶ね。あたしは神と人のいるところには、必ず顕現する者。あらゆる災厄とひとつかみの希望を与える魔女ですもの。驚くほどのことじゃないでしょう？……この子があたしの新しい娘ね。ふふ、苦しい？でも我慢しなさい、その痛みはあなたを最強の高みへと導く代償よ。甘んじて受けるといいわ！」

甘く可憐な声が耳朶を打ち、やさしく頭を撫でられた。

誰だろう、この声の人は？お母さんだろうか？

「さあ皆様、祝福と憎悪をこの子に与えて頂戴！八人目の神殺し――護堂よりもさらに若き魔王となる運命を得た子に、聖なる言霊を捧げてちょうだい！」

「ぬかせ、貴様の新たな落し子などすぐ葬ってくれる！」

「では、私フレイヤが祝福を与えます。貴女は私達の――――奔放な愛の女神と時の神の権能をさんだつする最初の神殺しです。何人よりも強く賢くなりなさい。再び我々と戦う日まで、負けぬ身でありなさい！」

「史上初めて二人の神を殺したあたしの落し子よ。楽しみにしているわ。」

こうして、八人目のカンピオーネは生まれたのだった。

幼女魔王リーゼロッテ・モルディオの誕生（後書き）

ふう、神様へんかもしれないけど気にしないでね。

カンピオーネ（前書き）

名前を変更しました。そして、原作お読みの方は、今回読む必要がありません。なぜなら、カンピオーネ第一巻目にあるカンピオーネの説明だからです。

カンピオーネ

【一九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの書籍『魔王』より抜粋】

……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

読者諸賢の中には、この呼称を大仰なものだと眉をひそめる方がいるかもしれない。あるいは、私の記録を誇張したものとみなす方もいるかもしれない。

だが、重ねて強調させていただく。

カンピオーネは覇者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらはしめる至高の力を奪い取るが故に。

カンピオーネは王者である。

神よりさんだつした権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。

カンピオーネは魔王である。

地上に生きる全ての人類が、彼らに抗うほどの力を所持できないが故に！

【二〇世紀初頭、枢機卿アントニオ・テベスが教皇庁に宛てた書簡より抜粋】

神に背を向け、悪魔の知識を弄ぶ魔術師どもに『王』と崇められる存在がございます。

おそらく、皆様も彼奴らの称号を一度は耳にしたことがおありでしょう。

カンピオーネ。エピメティウスの落し子。魔王。

極めて遺憾ながら、この者達に抗う術を我ら人類は持ちません。

彼奴らと互角に戦い得るのは、同等のカンピオーネか父なる神に使える天使たち、または忌まわしき異教の神々だけなのです……。

カンピオーネ（後書き）

変わりなく外見は星空〇メモリアに出て来る可愛い死神メアちゃんです。

記憶と言葉を無くして（前書き）

どんな魔術があるかわからないし、適当に自由にするさ！

記憶と言葉を無くして

ん……私が目を開けると見知らぬ天井が目に入った。

「……（ここはどこ？）」

声がでない……それに私っ！

思いだそうとすると激痛が走った。

なっ、名前は……リーゼロッテ……名字は……

……っ……思いだせない。

……年齢は……六歳……ぐっ……だめ

……わからない……思いだせない……ぅぅ
……どうしたら……ひっく……いいの……だれかたすけて……。

ドアが開き、おばあさんが入ってきた。

「おや、気付いんだねよかったよ。水をお飲み……」

おばあさんが水の入ったコップを差し出してくれた。

「……（こく）」

「けふぉっ、けふぉっ！」

喉が乾いていたので、水を活きよいよく飲んだため蒸せた。

「ほら、大丈夫かい？ゆっくりお飲み。」

「……（こく）」

「……あ……う……（ありがとう）」

「無理に喋らなくていいよ。ほら、お休み。お粥作っておくからね。」

お粥ってなぁんだろ……ねみゅい……。

「さぁ、お休み。」

「……（こく」

そして、私は眠った。

嫌……嫌……見たくない。

「逃げるんだ！」

「リゼットこっちよ！」

少女を連れて逃げる二人。

見たことのある顔……でも、思い出せない……思いたそうとすると激しい頭痛がするだけで……ちっとも思いだせない。

そして、二人が少女をかばい槍の一撃をくらい死んだ。

それから、少女は辺りを見回し絶叫した。

「「いやあああああああああ！！！！！」」

私と少女が悲鳴を上げた。

そして、目覚めた。

「大丈夫かい？」

隣でおばあさんが心配そうに声をかけてきた。

「……は……（はい）」

慌てて頷く。声は全然でない。

「そうかね、これを飲んでお休み。」

魔法瓶から温かそうな飲み物を貰いゆっくり飲んでゆく。

蜂蜜とミルクが混ざり合いとても美味しい。

「それじゃ、私は隣の部屋でいるから、なにかあったらお呼び。」

おばあさんは立ち上がり、部屋から出ようとする……いや……ひとりは……いや……

「どうしたんだい？」

無意識におばあさんの服の裾を掴んでいた。

「……あ……ぅ……」

「一緒にいてほしいのかい？」

「……（こく」

「分かったよ。なら、一緒に寝ようかね。」

「……（こく」

おばあさんに抱きしめられながらゆっくりと寝ることができた。

次朝、身体は動くようになった。

おばあさんに言われてお粥を食べた。初めて食べたけど、美味しい。身体の芯から温まって来る。

食後、おばあさんと会話をしている。

「まだ、話せないのかい？」

「……（こく）」

相変わらず、言葉でない。

「そうかい。じゃあ、ちょと待っといで。」

おばあさんは奥の部屋にいった。

「？」

なにを持ってきてくれるんだろ。

ゆっくり蜂蜜ミルクを飲み待っていると、長細い箱とスケッチブックみたいなのを持ってきた。

「字は分かるかい？」

「……ち……ゅ……し…（少し）」

「分かるみたいだね。」

おばあさんから、スケッチブックと長細い箱を受けとった。

「こっちはスケッチブックで、これはクレヨンだよ。孫の持ち物だけど、こいつらもだれかに使ってもらうほうが幸せだろうから、遠慮せずに使っておくれ。」

「……（こく）」

受けとったスケッチブックにさっそく文字を書いてみる。

「“ありがとう”」

「気に入って貰えてよかったよ。」

拙い字だったけど、伝わってよかった。

「私は、ツァオバラーよ。ツァオでもおばあちゃんでも好きお呼び。」

「“ツァオバラー……魔法使い……？”」

「ああ、名前は捨てたからね。今は、ここで一人暮らしさ。しばらくここに居るといいよ。」

「“ありがとう。おばあちゃん。”」

それから、数週間たった。

私は、相変わらず喋れない。

おばあちゃんの家にある本を読み本の内容を覚えていった。

「ここまで覚えたのかい。」

おばあちゃんが飽きれていた。なんでだろ？

「よく、理解できるね。基礎しか教えてないのに。」

おばあちゃんに魔術の基礎を教えて貰うと、魔術書の内容がすらす

らと理解でき、同時に使える確信が芽生えた。

「“かんたん……わかる。”」

「世の魔術師が聞いたら泣くレベルね。」

「“もっと……読んでいい？”」

「ああ、家にあるのは好きに使いな。後は、夜一人で寝るのとお風呂も入れるようになるいいんだけどね。リゼット？」

「“無理”」

内容は覚えてないけど必ずといっていいほど悪夢を見るし、お風呂は……目が痛いし。

一年がたった。

「まったく出鱈目じゃな。一年で魔術を極めてしまうか。」

「“家にある本は全部覚えた。”」

家にあったのは、ルーン、セイズ呪術、魔術。

「“次は錬金術を研究する”」

「そうか、頑張りな。」

「“うん。”」

それから、三年……１０歳の誕生日に運命は動いた。

記憶と言葉を無くして（後書き）

次は戦いです。
そして、どんどん強くなるリーゼロッテ。

愛称は二つ　リゼットとリーゼです。

クロノス（両方）とフレイヤの権能募集！

倒して欲しい神に壊して欲しい街や歴史的建造物も募集しますよ！

じゃんじゃんどうぞ！

リーゼロッテの覚醒（前書き）

イレブンアイズが混ざってる。
そして、リア友に戦う神なにがいいか聞いたらとんでもないのが来たので、頑張って書いてます。

明日……今日、続き頑張る。めっちゃ途中でメール容量超えました。

リーゼロッテの覚醒

【リーゼロッテは神殺しである】

おばあちゃんと暮らして四年の月日が経ちました。

私は、錬金術の頂きに届いた。

そう、完全物質である呪法増幅機賢者の石がと偶然の産物で虚無の石ができた。

おばあちゃんが取っていたオリハルコンと変な石を混ぜたらできたの。

「しかし、賢者の石まで作りだすなんてね。貴女の目は凄いから気をつけるのよ？」

「……（こく）」

私の右目には〔叡智の魔眼〕が魔術を習いだすと現れた。

叡智の魔眼は、あらゆる魔術、魔法や物質を解析し理解できる。

魔眼のおかげで、こんなに早く覚えられた。使いすぎると一定期間失明することを身を持って体験した。

「後、私に何かあったらこの手紙を持って、日本にいる草薙一郎って男に届けておくれ」

「“分かった”」

おばあちゃんの体調はどんどん悪くなっていく。

寿命……また一人になるの？エリクシールを作ろうとし

たけど……止められた。それに、意味がないらしい……
……ぅぅ。

「そんな顔するんじゃないよ。この頃、私はたのしいんだから。死んだ孫とは別に新しい孫ができたんだからね。」

ぐす……頭を撫でてもらうと安心する。

「私の技術も継承してくれたからね。」

「“闇の魔法？”」

「そうだよ。まさか、私が投げ出した魔法まで完成させるとはね。この希代の魔術師といわれた私だというのにね。」

アレイスターやエリファスって名乗ってたらしい。

「“目があるから、楽だった”」

「そうか、リゼットに伝えなくてはならないことが……
……おや、お客のようだ……リゼット今すぐ裏手から買い物へ行ってくれないかい？」

おばあちゃんの身体が若返っていく。それと同時に私の身体が軽くなった。

「……（こく」

得に気にせずに裏口から街に向かった。

アレイスターＳｉｄｅ

いったか、済まないリゼット。

さて、これで見逃してくれるといいのだがね。

私の肉体は二十代後半に戻っている。

外に出てお客様と対峙する。

目の前には、つば広い帽子を目深にかぶり、青いマントの老人がいた。

「ご用件をお伺いしたいまつろわぬ神よ。」

「決まっておろう。わしの愛人を殺したユピメテウスの落し子を始末するためよ。」

やはり狙いはリゼットか。

愛人……そして、この格好……

「神よ無礼を承知でお願い申しあげます。お見逃しいただきたくお願い申しあげます。」

「断る。」

神槍かまずいな。

「では、御手向かいいたします。」

「神に挑むとは愚か者めが、身の程をわきまえよ！」

さすがですね。勝てる気がしません。しかし、時間は稼がせていただく。

「契約のもと、アレイスター・クロウリーが願い奉る。顕現せよ魔術と冥府の神へカテーよ！」

空中に黒い神力の塊が出現する。

「ほう。」

「固定、掌握！ぐっ！」

冥府神の力を身体に取り入れ、神降ろしを行う。

「冥府神の力か、借り物の力でわしをどうにかできると思っているのか！」

「思っていません。ただ、譲れない物があるだけです。」

人生最後の戦いを大切な者のために開始した。

「来たれ冥府の雷！」

黒い雷を放ちながら、戦場を動き回る。

「無駄だ。」

やはり、雷では無理か。

「くっ！」

向こうも雷撃を放ってきたが威力が段違いだ。拳銃と弾道ミサイルくらい違うな。大地に手をつき神力を流しどうにか避ける。

「避けたか。では、こいつでどうだ？」

奴の影から狼が二匹現れた。

「くそ。」

襲い来る狼をよけ、大地に神力を流し込む。

「我が矢は矢にあらず、死の力を宿すものなり！」

弓を作り、矢を放つ。

「！」

狼を貫き、大地に縫い付ける。

「ちっ、殺すこともてきんか！」

奴の炎の魔術を避けたところ右腕に噛み付かれた。

「く、ただではくれてやらん！舞え、炎獄！」

右腕もろとも狼を燃やし尽くす。

片腕を抑え出血を抑える。都合がいい。

「やるではないか！」

神槍を構え突っ込んでくる。

「させるか！風よ我が意に従い顕現せよ！サイクロン！、風よ我が身をつつめ！」

嵐を呼び奴の妨害を行う。さらに風を纏い距離を稼ぐ。

これで……っ！

「がっ！！」

サイクロンを突き破り、一本の槍が飛来し左足を貫いた。

「くそ！」

左足がちぎれたか！

「どうやら、ここまでじゃな。死して我が配下に入るがよい。」

ここまでなのか？

「そして、貴様の手で憎き神殺しを殺してくれるわ！」

ふざけるな！誰がそんなことさせるものか！大切な者をまたこの手にかけるなど許せるか！

「ほう、まだ抗うか！」

「ぐは！！」

蹴られ、家の壁に激突し、壁が崩れた。

ここまでか！

「おばあちゃん！！」

リゼットの声が聞こえる……。

アイレスターＳｉｄｅＯｕｔ

おばあちゃんに言われた通り、裏口から山を下る。

お客様って誰だろ？嫌な感じがするけど……。

っ！

なに今の音……

。家のほうから轟音が聞こえてきた。

なにかあったの？

狼の遠吠え……戻らなきゃ！

家に入ったら、壁が崩れて若い姿のおばあちゃんが飛ばされてきた。

「おばあちゃん！！」

「……逃げろ……奴は……お前を……」

「嫌！」

なんで、おばあちゃんが！

「……だ……し…で……！（だめ、死なないで！）」

どんどん血がながれてゆく。

「……なっ……ひっく……ぅぅ……（なんで……ひとりに……しないで……）」

「なく……な……それ……より……伝える……ことが……ある…」

「“なに？”」

スケッチブックの既に書いてあるページをひらく。

「……リゼ、ット……お前……は……カンピ……オーネ、だ……お前が……殺し……た神の復……習らし……だから逃げ……ろ……いき……ろ……」

それだけ、いっておばあちゃんは目を閉じた。

やだ……私のせい？

私が神を殺したから……。

ふらふらと外に出ると、つば広の帽子を目深に被っり青いマントを身につけ、灰色の髭を蓄えた片目の老人がいた。襲い来るプレッシャーは半端ない。

「お初にお目にかかる。若きユピメテウスの落し子よ。我が名はオーディン。貴殿に殺された愛人フレイヤの敵を取りに来た。」

なにを言っているの？私が殺したなんて……。

「“そんなの、私知らない！”」

そんなことでおばあちゃんを殺したの！

「ふむ、記憶がないのかね？」

「……（こく）」

「ふむ、なら戻してやるかの！」

っ！目の前に行きなり現れ首を絞められる。

「……ぁ……っ……」

苦しい……息ができ……ない……

「んっ！」

指を口の中いれられなにかの魔術をかけられる。

「さあ、思いだすのじゃ！」

その言葉と同時に頭の中に今までの悪夢の内容やいろいろなことが流れ込んでくる。

「いやああ！！！！！！！！！！！！」

「ふはは、おもいだしたか！」

オーディンは私を放り投げた。

「貴様のせいで我が計画が狂った。ゆえに貴様をフレイヤ復活のための贄にしてくれる。」

「はぁ、はぁ。がぁ、！」

蹴られ殴られ続ける……お母さんもお父さんも、おばあちゃんも友達もみな死んだ……生きてる意味あるのかな？

「ふん、あの愚か者も愚かな無駄死にだったな。」

「ぐ……かはぁ！」

踏み付けられ、蹴られる。

「このような者のために、命を落とすとはな！」

おばあちゃん……。

「っつ！」

槍で刺され死を意識する。

――――――本当にいいの？このまま死んでも――――――
――――

貴女は誰？

――――――私は貴女、６年間生きた私――――――私はあいつらを許せない――――――私から全てを奪った神を許すことはできない――――――貴女はどう？おばあちゃんを奪ったあいつを許せる？――――

許せない。

――――――おばあちゃんが最後に願ったことは？――――――

生きろって……。

――――――なら、行きましょう。私達の前に立ち塞がる者をことごとく排除しましょう――――――

うん、私達から大切な者を奪った奴らに復讐する。そして、おばあちゃんが願った通り生きる！

――――――ええ！――――――私達はここから生まれる――――――さあ、行きましょう。私達は覇道の道を進むのみ！！！！！！――――――

私の前に、自分と同じ姿……今の私よりほんのすこし小さい姿の少女が現れ手をさすだしてくる。

私はその手を躊躇なく握り返しす。

「なんじゃ、いきなり神力が上がったじゃと？」

二人のリーゼロッテが混ざり合う。

「「我は冥府魔道を進む者なり！」」

初めて自分の声を発する。

「「我が覇道の前に立ち塞がる者をことごとく打ち砕く者なり！」」

宣誓を行っていくと身体の奥から力が沸いて来る。

「「人であろうと、神であろうと、魔王であろうがありとあらゆる生きとし生きるものに死を与えん！！！！」」

二人のリーゼロッテが完全に混ざり合った。

「なんじゃこの馬鹿見たいな神力と呪力は！」

完全に混ざり合うと同時に爆発的に神力が増大した。

「成った。」

頭の中がすっきりしている。

「覚醒したか。遊び過ぎたか。しかし、これもよい！さい、戦うぞユピメテウスの落し子よ！！！！」

「私は破壊し殺し殺戮するだけ。」

「やれる物なら、やってみるんじゃな！」

「言われるまでも無い。」

そして、手を付きだし攻撃を行う。

「契約に従い、我に従え、四元の女王、我が前に立ち塞がる者に死を与えよ、虚無の滅び。」

四元素を全て合成し、目標地点で対消滅を起こさせる。

「これは、まずいの！スレイプニルよ！」

はずした。

オーディンはスレイプニルに乗りグングニルを構え高速で突っ込んできた。

「我が槍は避けられぬぞ！」

グングニルがやっかい。地面に手をつけ土の壁を多数錬成し、防壁にする。

「無駄じゃ！」

「！」

多重障壁を展開。同時に、氷の槍を多数打ち出す。

「無駄無駄！」

「くっ、痛い。」

クングニルによって吹き飛ばされた。

その後も応戦するが、クングニルの絶対命中は強力だ。

「どうした口だけか！」

暴風となり襲ってくる。

「ブラストフレア！」

オーディンの隙をつき吹き飛ばすが黄金の鎧に阻まれダメージが無

い。

すかさずオーディンはクングニルを投擲してくる。勝利の笑みを浮かべている。

死の恐怖と憎悪が増大する。そして、一つの権能が使用可能になった。

「停滞空間。」

使用したのはクロノスの権能〔時の支配者〕。時間をとめ、叡知の魔眼を過剰に使用し止まっているグングニルを分析する。

グングニルを手に取り全力で支配し、大量の賢者の石と虚無の石を使い分解、再構築を行う。

クングニルは鎌に生まれ変わり私の物となった。

リーゼロッテの覚醒（後書き）

やっちまった。リゼットが冥府魔道に……まいっか。私が好きな言葉は善悪相殺。

感想あるがとうございました。

なぜなに幼女魔王様は～じま～るよ～（おい

今回は、リーゼロッテの権能について～です。

実は時の支配者以外にも使われてます。そう、叡智の魔眼です。
時の支配者は、その名の通り時間を操れます。
その中でも三つの区別がある。
一つ目は今回使われた停滞空間。これは一時的に時を止めることができる。制限時間は一日で約１０分から３０分の間止められる。
止めてる間に生物攻撃しても意味はない。
この空間、内で動ける生命は本人のみ。
物とかなら触れて許可をだしたら元にもどる。今回はグングニルを元にもどし、神力を思いっ切り使って支配を奪いとりました。

ここからは、代償を説明するね。

停滞空間の代償は止めた時間の１０倍肉体の成長が止まる。

名前は考えてないけど、未来に進ませる方は歳をとる。過去は身体の年齢が下がるです。レートは過去未来はもうちょと厳しくしよう

かなとも考え中です。

覚醒条件、使用条件は恐怖と憎悪です。クロノスは怖くて息子たちを食べたから。憎悪は親を殺したから（？）、もしくは子供を憎んでたんじゃないかな？一時は。

次はフレイヤより叡智の魔眼。

これも権能だよ。リーゼロッテは理解してなくても使ってたけど。

智の女神と呪術の女神としてだね。
才能はあったし、女神の権能でも上がった。そして、駄目押しが魔眼ですね。解析、細かく調べられる。

覚醒条件は魔術などを習う。

代償、使用制限。

長時間の連続使用や解析難易度で変わるが基本的に、目から血がでるまではまだまし、痛いだけ。
負荷が超えると一定期間右目が失明し不規則に痛みが襲う。
最初は約三ヶ月失明した。草薙の復活と同じくどんどん下がってく予定です。

ドイツで魔術結社だすならゲーテ？

まあ、リーゼロッテ的に日本にむかって歩くだけ！

では、このへんで。また会いましょう。

なぜなに幼女魔王様終了。

主神オーディンとの死闘

そして、できた鎌は全身が紅く、刃身の真ん中に漆黒で色々なルーンが刻み込まれている。

「なんだ、なにがどうなったのじゃ！」

「クングニルを掌握して作り替えた……」

驚いているオーディン。

「いく……ブラストフレア！」

隙を逃さず魔術……魔法の域に届いた術を行使する。先程とは威力が違う。この鎌自体が賢者の石でできているし、ルーンも刻まれているのだから、増幅効果は圧倒的。

「ぐはぁ！」

今度はダメージが入った。追撃をかける。

「神々のいましめを解き放たれし、深淵よりも黒き虚無の刃よ、我が力、我が身となりて、共に滅びを与えよ、神々の魂すらも打ち砕かん！」

言霊を使い鎌……殲滅者（ディザスター）の虚無の力を解放する。

「加速増幅（アクセルブースト）。」

即席で身体加速魔法を創り、吹き飛ばされたオーディンと相馬スレイプニルに接近した。

「死んで……。」

スレイプニルの頭を刈り取り、遠心力を利用した切り返しでオーディンの首を狙う。

「っ！ユル！」

防御のルーンか……。

「エオー！」

不可視の障壁を切り裂き消滅させた時には、既にオーディンはエオーを使いランダムに移動したみたい。見渡すと離れた位置にいた。

「仕留め損ねた。」

「おのれ！来たれ、戦乙女（ヴァルキュリア）！」

背中に羽根のある美しい女性が数人現れた。

「ありがとう……わざわざ教えてくれて。」

「なんじゃと！」

「私は……フレイヤの権能を持つ。そして、フレイヤも戦乙女を統轄している。つまり……来たれ、戦乙女（ヴァルキュリア）！」

こちらも戦乙女の権能を使い召喚する。

「くっ！」

「「行け！！！！」」

同時に指示を出した。戦乙女同士の激闘が始まった。

お互い、指揮しつつ魔術を撃ち合う。

「ティール！」

戦いのルーン……なら……。

「多重発動、術式拡大・狂戦士、再生の炎！」

狂戦士により身体能力が格段に上昇し、傷を恐れなくなる。ほぼティールと変わらない。再生の炎は傷を持続的に治してゆく。

「ソーン！」

オーディンがさらにルーンを使い氷の巨人を召喚された。

急ぎ近づき、殲滅者で切るための準備をする。

「刀身を再構築……巨刀。」

巨大な刀身に再構築し直し巨人を一刀両断する。

「っ！」

巨人を殺したところに炎槍と氷槍がとんできた。

「ディヴァイン・コロナ！」

コロナを創りだし炎槍と氷槍を破壊し光があふれるなか、停滞空間を使い、オーディンに接近し解除と同時に切り付ける。

「対策はしておる！」

鴉が割り込んできた。

「残念。」

「次はこちらからじゃ！」

その後、何度も切り結んだ。

だんだん、押されてきた。悔しいけど、さすが北欧神話の最高神っていうところ地力が違う。

なにかないかな？打開策を見つけなきゃ負ける。止めの一撃はあるけど当たらない。

アイレスターＳｉｄｅ

まったく、逃げろと言ったのにな。

覚醒すればもはや、平穏な生活とは無縁なのにな。

「しか、し……さすが……」

孫娘のために最後の一手をくれてやるか。

激痛を堪え、這って進む。

「いま……だ……」

リゼットとオーディンが離れた。

「はつ……どう……オー……ディン……きさ……ま……の……まけだ……」

貴様が敗北する理由は私とリゼットをあなどったことだ。

さあ、冥府の鎖タルタロスよ。我が命も吸い付くし奴を戒めよ！！

！！

後は、まかせたぞ……我が愛しき子よ。

クロウリーＳｉｄｅＯｕｔ

これは、おばあちゃん？

私は、おばあちゃんの呪力を感じた。

「なんだこれは！」

大地に六芒星の魔法陣が現れ、中から漆黒の鎖が出現し、オーディンを搦め捕る。

「いまがちゃんす……」

「く、外れぬ！あの人間の仕業か！」

「おばあちゃんがくれたんだ。ここで仕留める……我は神を殺し、神の力を簒奪するものなり！」

身体は既に限界を超えているが執念で動かす。

「く、砕けよ！」

タルタロスの鎖がどんどん壊されていくけど……私の刃はオーディンに届いた。

「まだじゃ！」

「ううん、これで終わりだよ。神を砕く者！」

オーディンに突き刺さった刃から虚無が溢れ出しオーディンの内部から破壊してゆく。

「がああああああ！！！！」

神殺しの虚無の刃の言霊と神を砕く者による内部からの解放攻撃。正真正銘、全力全開。神力、呪力共に全てを虚無の破壊に注ぎ込む即席で創りだした最強の切り札。

「覚えておれ！！！！我は貴様を必ず殺してやるわ！！！！」

その言葉を最後に残し消滅した。

それと同時にオーディンの神力が流れ込んでくる。

「勝った……おばあちゃんは……」

傷だらけの身体を引きずりおばあちゃんの元へいくとそこには……

……おばあちゃんの服とおばあちゃんが大切にしていた……

神力を醸し出している黒い十字架のペンダントがあった。

「おばあちゃん……ありがとう……私は生きるよ……」

これだけは、持っていこう。ペンダントを首にかけてお墓を作り、相談してあった通り家を燃やす。悪用されそうな危険な魔術書などがたくさんあるから……認識疎外と人払いの結界を張り……

「うぅ……おばあちゃん……」

涙が止まらなくなり一晩中泣きつづけた。

次の日、右目を押さえながら街へと向かった。

主神オーディンとの死闘（後書き）

ふう、終わった。

先生〜オーディン強すぎルーンまじ反則。

補足説明

最後のタルタロスの鎖は、対象の力を一時的に封印できます。

あと、準備してる間にタルタロスの鎖を回収したリーゼロッテである。

送り返してないからちぎられた部分は残りそれを合成して自分の物にしたリゼット。

現在の装備

主兵装：殲滅者（ディザスター）これは、体内に収納。

補助武装：タルタロスの鎖。これは、左手にある。伸縮自在。

アクセサリー：神器のペンダント（十字架）。なんの神かは分かっていない。

です。

では、次回。感想待ってます。

新たな出会い

地形が変わった山を、まだ身体中に傷が残っている状態で一生懸命下山していく。

うぅ、痛い……ぁぅ、頭打った～……ぐす。

左目だけだから、距離感がわからない……戦闘中はカンピオーネの力で大丈夫だったんだけど……。

ぁぅ、こけた……。

そして、身体中に傷を作りつつなんとか街に辿り着いた。

「？？？」

ネチュカワの町につきました……おかしいの……

違う街にいくはずなのに……なんでだろう？

うにゅ……ねむいの……

「おい、大丈夫か？」

倒れてゆく身体を誰かが支えてくれたねが分かった。

「おい、しっかりしろ！」

誰かの声を聞きながら意識が途切れた。

【一年前に賢人議会に提出された報告書より】

――――――――――ドイツで起きた消滅事件について、この事件は調査の結果まつろわぬ神フレイヤとクロノスが戦っていたことが原因だと思われる。それと同時に新たな魔王が生まれたという噂も出て来た。

【賢人議会に提出された新たな報告書より】

――――――――――北欧の最高神オーディンがまつろわぬ神としてド

イツに顕現したとの神託がくだされた。一年前に消滅したフレイヤとクロノスとの関連性も疑われる。そして、次の日にはオーディンが何者かに殺されたみたいです。結果を見つけ中に入ると、地形が変わった山を見つけた。これは明らかに神と何者かが争った形跡がみつかった。しかし、神殺しや別の神もこの地に現れていないことからドイツに八人めの神殺しが現れた可能性がある。

……ん、ここはどこ？

「お、きづいたか？」

「……ぁ……（ここは？）」

っ！また……言葉がでないよ……

「おい、どうした？」

「……あ……ぅ…」

頑張ってジェスチャーで伝える。

「言葉が出ないのか。」

「……（こく」

「そうか、どうするか。」

十代後半ぐらいの少年が困っていると、奥から少年と同じくらいの少女がやってきた。

「きづいたみたい？」

「ああ、それが喋れない見たいなんだ。どうするか？」

「なら、紙と鉛筆。」

紙と鉛筆を受けとりお礼をする。

「“ありがとうございます。”」

「俺はシンだ。こっちはステラ。」

「よろしく。」

黒髪の男の人がシンで金髪の少女がステラ……覚えた。

「“リーゼロッテ。リゼットでもリーゼ好きに呼んで下さい。”」

「分かった。」

「うん。」

それから、しばらくして不思議な事実に気付いた。

「“消失事件は四年前じゃなくて一年前？”」

「うん、そうだよ。」

そういえば、おばあちゃんがここの結界は特別だっていってたから、それのせいかな？

「“ありがとう”」

「気にしなくていいさ。」

それから、話しを聞くとどうやらネチュカワの町で二人ぐらししているらしい。

「リーゼは何処にいこうとしてた？」

「“日本に行こうとしてた。”」

おばあちゃんから受け取った手紙を届けないといけないし。

「日本……お金が結構な額必要だがあるのか？」

「“ない”」

手元には、Ｅｕｒｏ（ユーロ）が少しあるだけ。

「“でも、飛んでいけばいい”」

「飛んで？」

ステラの疑問はもっともだよね。

「“魔術で飛んでいくの”」

「君も魔術使えるんだな。」

「“貴方達も使えるんだね”」

「「うん／ああ」」

「でも、無茶……」

「“そうかな？”」

「うん（なでなで」

ふわぁ、気持ちいいです。

「日本までの距離を考えると無理だな。」

残念です。戦乙女（ヴァルキュリア）に持って貰って飛ぼうとおもったんですけど。

「それと俺達は、東北聖堂騎士団には追われている。」

東北聖堂騎士団はたしか、性魔術結社でしたね。

「ステラが狙われてるんだ。」

「“なぜ？”」

「神を召喚するための生贄にするんだと。ふざけやがって。」

「だから、シンが連れ出してくれた。」

「“なるほど、わかりました。”」

助けていただいた恩もありますし排除しましょう。

「危ないから、傷が治ったら出て行ったほうがいい。」

「だな。」

「“わかりました。しばらくお世話になります。”」

しばらく、シンとステラのお世話になることにした。

新たな出会い（後書き）

シンとステラ……ええ、種運命ですよ。ステラが好きです。シンは殺すかどうするか悩み中（ぁ

新たな神？

ステラお姉ちゃんやシンお兄ちゃんと一緒に生活しだして一週間がたったです。

「おい、二人共できたぞ」

「「“はい”（うん）」」

ステラお姉ちゃんは声を出して、私はスケッチブックで返事をするのです。

「はい、持って行って」

「・・・ん・・・」

二人で、シンお兄ちゃんが作った卵とクリームチーズソースを絡ませたパスタを二人でテーブルに運ぶのです。

「“美味しそうなのです”」

「うん」

湯気を出している美味しそうなパスタ。具材は厚切り生ベーコンに

マッシュルーム、玉葱・・・・・・・あらびきコショウもいいアクセントになっているです。

「・・・・・・美味しい・・・・・・・・」

“はい、とても美味しいです。いつもありがとうです”」

皆さんお分かりかも知れませんが、リーゼとステラお姉ちゃんはいっさいの生活能力が無いのです。はい、シンお兄ちゃんにたよりっきりです。あと、リーゼは一応料理は出来るのです。材料を鍋に入れて呪力を込めながらネルネルするだけなの簡単なお仕事なのです。

「どういたしまして。それより、リーゼはどうするんだ？怪我はもういいんだろ？」

“はいです。この一週間の間に完治したのです”」

右目はまだ使えませんけど、身体や呪力は回復したのです。

「そうか。なら、もう行くのか？」

“はいです”」

「心配」

“大丈夫なのです”」

前から予定していた事です。

“それに、早く手紙を届けないといけないのです”」

「そっか・・・・・・」

晩ご飯を食べた後、部屋に金塊を１０個くらい作り出してから、深夜にこっそりと抜け出したのです。

そして、移動したのはこの街の出入口である橋なのです。リーゼは鎌を持って、この橋で仁王立ちなのです。

「止まれ！」

しばらくすると、白い鎧の一団がやって来たのです。

「小娘、何用だ。我等の邪魔だてをするなら許さんぞ」

「“それは、こちらのセリフなのです。二人の邪魔はさせないのです”」

「あの二人の知り合いか・・・・・・ならば、貴様も生贄にしてやろう！！行けっ！！」

「「「「「「おう！」」」」」」

迫って来る人達を放置して、スケッチブックを仕舞うのです。

切り掛かってきた騎士さん達に、殲滅者（ディザスター）を一閃・・・・・・それだ

けで、三日月のような鎌に騎士さん達の下半身は消滅したのです。

「なっ、何だと！？」

「馬鹿な！？」

「“逃げないでくださいです。橋が壊れちゃうので・・・・・・だめです”」

鎌の柄で、地面を叩き地面に五芒星を展開・・・・・・騎士さん達の足元にも五芒星が展開されたのです。

「「「「な、なんだ！」」」」

「“エクスキューショナー”」

触れるだけで対象を殺す呪力を込められた闇を作り出す魔法なのです。しかも、苦痛とその人にとって最悪が再現される魔法なので、苦しみながら死んで行くのです。

「“呆気ないのですよ？”」

「ひっ・・・・・・」

「“貴方達の本拠地を教えるのです”」

「わ、わかった！だから、命だけは・・・・・・」

「・・・・・・（こく）」

騎士さんを約束通り、生かしたまま賢者の石にかえてから、騎士さんに教わった場所に、騎士の賢者の石を使ってメテオスフォームを撃ち込んでやったのです。

これで二人は安心なのですよ。

アリスＳｉｄｅ

「今、街が一つ消滅しました。私、アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァールが霊視いたしました」

「それは、いかなる神又はカンピオーネですか？」

「行使されたのは魔法域に達した魔術ですね。場所はドイツでした」

「まさか！」

おそらくは、一週間前に報告された八人目の神殺しでしょう。

「あそこには魔術結社がありましたね」

「確か、神を召喚しようとしていたはずです」

「では、神を召喚できたのか？」

「いえ。生贄に逃げられたと報告が上がっています」

「馬鹿だな」

「ええ」

確かに、愚かにも魔王たるカンピオーネに眼をつけられるようなことをしたのですから、彼等の死は自業自得で問題はありません。問題は民間人に被害が出ていることですね。

「ドイツに至急諜報員を送り込んでくだ・・・・・・っ！」

「どうしました？」

景色が移り変わる。これは託宣かしら。

「街を生贄に召喚された空を飛ぶものをあまねく支配下におく蠅の女王、新たな神殺し・・・・・・」

「プリンセス・アリス・・・・・・まさか・・・・・・」

「どうやら、最後の悪あがきで神を召喚したようですね」

「・・・・・・」

「なんて事だ・・・・・・それに、召喚された神は・・・・・・」

ええ。おそらく、ビックネームでしょうね。

アリスSideOut

新たな神？（後書き）

召喚されたのはあの方です。

「なんでわたしなのよっ！？　しかも、召喚された瞬間隕石による爆撃ってなんなのよ！？　ねぇ、死にたいの？死にたいのよね！！」

（ＣＶ：ゴトゥーサ様）

という感じです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3100s/

カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

2011年10月28日15時04分発行